



大阪府立北野高等学校図書館 第5号

分かりきっていることですが、本も漫画もおもしろい。漫画はとにかく読みやすい。視覚で伝わって

くるので分かりやすいです。本は読みにくいです。ただ、登場人物や場面を自分の想像で好きなようにイメージできるので、漫画より自由です。自分の好きなようにイメージして楽しめるのは、本のいいところだと思います。

一年生に好きな本のアンケートを取りました。その中からいくつかを掲載します。

「鉄道員」 浅田次郎 集英社 913 A31 2

将来の夢が小説家ですが、こういう本が書けたらいいのになーと、思います。

「ブレイブストーリー」 官部みゆき／〔著〕 角川書店 913 M71 61 62

2005 or 2006年にアニメ映画化された。少年渡るがバラバラになった家族を元に戻すために異世界で冒険する。旅を通して"本当の勇気とは?"を問いかけてくれるファンタジー作品。

**「ローワンと魔法の地図」シリーズ エミリー・ロッド／作 さくまゆみこ／訳 佐竹美保／絵
出版社名 あすなろ書房**

ファンタジーですが！！分厚くて重いけど、とにかくおもしろいです！！

「ナルニア国物語」 C. S. ルイス／作 瀬田貞二／訳 岩波書店 933 L10 1—1~7

読者の想像力に委ねる形で進められているから、それぞれのナルニアを作れる点がおもしろい。

「1Q84 1」 村上春樹／著 新潮社 913 M60 1 3—1

読んでいると心が落ちつく。

「ぎぶそん teens' best selections 7」

伊藤たかみ／〔著〕 出版社名 ポプラ社

「空をつかむまで」 関口尚／著 出版社名 集英社

青春の色に染まっていて、読んでて楽しい。

「桐島、部活やめるってよ」 朝井リョウ／著 集英社 913 A38 1

もっのすごく共感できる。学校で、たまにこの本を思い出す。

「ぼくらのシリーズ (ぼくらの七日間戦争 等)」 宗田 理

宗田おさむが好き。

「ぼくたちと駐在さんの700日戦争」 ママチャリ／著 小学館

筆者の昭和時代をほぼノンフィクションに書いた作品。高校生のママチャリとその他の仲間と、その町の駐在さんとの戦いをおもしろく書いている。

「空想非科学読本」「空想非科学大全」 柳田 理科雄 404 Y5 1-1~8

楽しく科学を学べます。(マンガやアニメを科学的に分析したものを解説する本です。)

「ミッキーマウスの憂鬱」 松岡圭祐／著 新潮社

主人公の仕事に対する熱い思いが伝わってきます！！

「プリンセス トヨトミ」 万城目学／著 文藝春秋 913 M83 4

豊臣家の末えいを守るって話だけど、読んでみないとおもしろさはわかんないと思う。本気でおもしろいと思う。万城目さんはぜひ読んでみるべき！！

「アイスクリン強し」 畠中恵／著 講談社

明治になったばかりの東京で若者たちの身の周りで様々な事件が起こる。

「障害役者 走れなくても、セリフを忘れても」 柳浩太郎／著 ワニブックス

とても深い話です。

「犬と私の10の約束」 川口晴／著 文藝春秋 ルイス・キャロル／著 河合祥一郎／訳 (仮)

主人公「あかりちゃん」と、ある日突然現れた犬の「ソックス」との物語で、とても感動的でした。あかりちゃんは母を亡くし、その入れ替わりのようにソックスがやってきて、あかりちゃんを支えてくれました。

あかりちゃんの母が無くなる直前、あかりちゃんにソックスと10の約束を結ばせました。しかし、あかりちゃんが成長するにつれ、恋人ができ、ソックスへの愛情がうすれていきました。ところがソックスは常にあかりちゃんのことを思っていて、年をとってもあかりちゃんの声の聞こえと元気になりました。ついに、ソックスが亡くなる時が来ました…。はたしてあかりちゃんはどうなるのか？

「獣の奏者」 上橋菜穂子／〔著〕 講談社

母親が獣医で、獣の死の罪に問われ殺される主人公が他人に助けられ、自分も獣医になる物語。2巻で完結だったが、続編が出た。

「陽気なギャングが地球を回す」 伊坂幸太郎／著 祥伝社 913 I42 8

登場人物がおもしろい。

以下は私の好きな本です。

「坂の上の雲」 司馬遼太郎 新潮社 918 S15 1-24~26

物語は明治初期から日露戦争終結まで。

一番の見所は日露戦争。旅順要塞攻めと日本海海戦。秋山兄弟を知るには正岡子規が欠かせないかもしれませんが、見所は日露戦争だと思います。歴史で習ったときは日露戦争で日本が勝ったということが実に不思議でしたが、本当に無茶苦茶な戦争だったことがよく分かります。旅順要塞において、数え切れないほどの人間が死んでいく過程では、司令部に対して、怒りを超えて憎しみさえ抱きかねません。無能なものが指揮権を持つことがとてつもない罪悪であるということがよく分かります。

「国盗り物語」 司馬遼太郎 新潮社 913 S4 2-1~4

妙覚寺の法蓮房は、松波庄九郎と名乗り、天下の主となる夢を持って寺を出ると、京の油屋・奈良屋のつとり、莫大な資産を獲得した。だが天下取りの野望を捨てない彼は美濃にくんだり、土岐頼芸に仕える。かつては「知恵第一の法蓮房」と呼ばれた庄九郎は、策謀の限りを尽くして頼芸を追い出し、美濃を手中に入れる。名前がころころ変わる庄九郎は、出家して斎藤道三と名乗った。

一介の坊主が一国の主になるまでの話。司馬遼太郎の小説は、登場人物が生き生きとしていて、すぐそばでその人間が動いているような気になります。歴史上の人物を、1人の人間として見ることができると思います。思わずニヤリとさせられてしまう場面多数。

「神様のパズル」 機本伸司 角川春樹事務所

(本文中より抜粋)「宇宙は”無”から生まれた」と、彼は言った。「すると人間にも作れるんですか？無ならそこら中にある——」

「でも、頭のいい人が考えてそう言ってるんだから、きっとそうなんですよ」

「あなたは何ともないのですか？」

「宇宙がどうしてできたかも知らずに生きているということが。そしてこんな根本的なことも分からずに死なねばならないということがですよ」

ちょうど8年前の12月、「宇宙の作り方知ってますか？」という宣伝文句にひかれて、梅田の紀伊国屋でこの本を買ったことを今でも覚えています。当時、大学2年生。宇宙というものが真剣に研究されていることさえよく知りませんでした。あんな途方もないものを研究するということが現実離れしているように思っていました。

ところが実際は、ものすごく真剣に研究されていました。「エネルギーって何？」「質量って何？」「時間って何？」「なぜ光速を超えられないの？」

この本では、物語の展開の中で、現在主流になっている理論が実に分かりやすく解説されています。数式は無し。イメージを説明してくれています。高校で物理を選択していなかった私でも問題無く読めました。

物理って本当にすごい！！そう思います。宇宙という途方もないものを地道に研究し、少しずつでも解き明かしていつかいます。まだ人間というものは追いかけるべき目標があったんです。まだ未知なるものを追いかけているんですよ。人間というものは本当にすごいと思います。分かっていたことを解明していきますからね。

物語の最後では、宇宙を作りだそうとしますが、そこはフィクションです。まだ人間は宇宙を作れていません。

「宇宙に果てはあるのか」 吉田伸夫 新潮選書 443 Y3 1

(本文中より) 科学の最先端では、その人に伺いを立てれば、たちどころに真実を教えてくれるような賢者は存在しない。多くの科学者たちは、誰も正解を知らないまま、手探り状態のなかで研究を続けているのである。本書では、「宇宙論」と呼ばれる分野で、科学者たちが、さまざまな間違いや誤解を重ねつつも、試行錯誤の末に新たな知識を獲得するにいたる過程を見ていきたい。

科学者たちの努力にもかかわらず、宇宙には、まだ多くの謎が残されている。いつか人間がすべてを明ら

かにできるとも思われぬ。しかし、これまでに解明された部分だけでも、科学が世界についての認識を著実に深化させてきたことの証である。そこに、宇宙に比べてあまりにはかないわれわれ人間の存在意義を見いだせないだろうか。

本書では、現在までに獲得された、宇宙に関する認識や知識を、数式無しで解説してくれています。イメージを解説してくれます。読んでみると、現在語られている理論も、意外に詰めの甘い根拠に基づいているんだなと思いました。

例えば、星までの距離の測り方。遠くになると結構いい加減です。ある種の星の色を基準にしているそうです。

宇宙が無から誕生したという説も、「膨張しているのなら、元をたどれば収縮していつているはずだ」という話から出ているようです。でも全ての収縮が0に向かうとは限らないわけで、もしかすると1/2で止まるかもしれないわけです。その辺はどうなんだろうと思いました。

収縮ついでにブラックホールも。ブラックホールは高密度の物質の集まりです。別に「穴」があるわけではありません。高密度なので重力が大きい。重力が大きいから自分の重力に耐えきれずに収縮。収縮するからより高密度。密度増加で重力が増加、さらに収縮。何か数Ⅲの数列みたいな存在です。こうして重力が果てしなく増加していく天体。そういうものらしいです。

「白痴」 坂口安吾 新潮社

(本文中より)

伊沢は女と肩を組み、蒲団をかぶり、群集の流れに訣別した。猛火の舞い狂う道に向って一足歩きかけると、女は本能的に立ち止り群集の流れの方へひき戻されるようにフラフラとよろめいて行く。「馬鹿！」女の手を力一杯握ってひっぱり、道の上へよろめいて出る女の肩をだきすくめて、「そっちへ行けば死ぬだけなのだ」女の身体を自分の胸にだきしめて、ささやいた。

「死ぬ時は、こうして、二人一緒だよ。怖れるな。そして、俺から離れるな。火も爆弾も忘れて、おい俺達二人の一生の道はな、いつもこの道なのだよ。この道をただまっすぐ見つめて、俺の肩にすがりついてくるがいい。分ったね」女はごくんと頷（うなず）いた。

その頷きは稚拙であったが、伊沢は感動のために狂いそうになるのであった。ああ、長い長い幾たびかの恐怖の時間、夜昼の爆撃の下に於て、女が表した初めての意志であり、ただ一度の答えであった。そのいじらしさに伊沢は逆上しそうであった。今こそ人間を抱きしめており、その抱きしめている人間に、無限の誇りをもつのであった。二人は猛火をくぐって走った。

たまに息抜きしたい時にはいい本だと思います。私は3回ほど読みました。人間が普段直視したくないところを書いていると思います。

12月10日（金）から図書の特集貸し出しが始まります。受付は12月24日（金）までです。1人10冊まで借りられます。返却日は1月11日（火）です。忘れずに返却してください。

